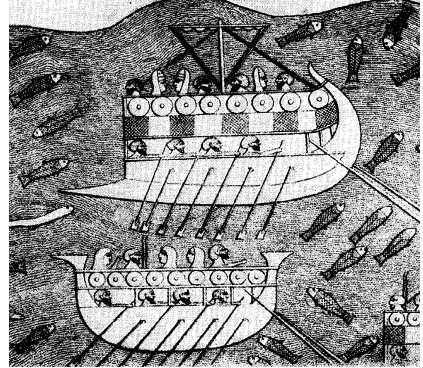


奈良の平城の坂道の絵本の店で、「大きな魚にのまれたヨナ」という題の素敵な絵本を見つけました。旧約聖書の中の「ヨナ書」の話です。

旧約聖書はあまりに大きすぎる神が言いたい放題のことを言うので、僕には付き合いにくいところもあるのですが、今回はこれが面白かったので、ポコア風に書いてみました。



昔、イスラエルにヨナという名の人があった。畑を耕し羊を追って暮らしていた。ある日、ヨナは仕事を終えて休んでいるとき、主（神）の声を聞いた。

「立てっ！」と主は言われた。立って大いなる町ニネベに行き、町の人々に彼らの悪がわたしの前に届いていると告げよ と。

ヨナは恐ろしさに震えながら「主が私に語られたのだ。私はそれに従わなくてはならない」と思ったが、一方で「なぜ私がニネベに行かなくてはならないのか」とも思った。ニネベはアッシリアの都でイスラエルの敵ではないか。それにヨナが行ったところで、彼らが悪しき行いを正すとは思えなかった。

「しかし、主の言葉に逆らってここに止まるわけにはいかない」

そこでヨナはタルシュシュに遁れることにした。タルシュシュはニネベとは反対の西の海の彼方にある国だ。

ヨナはロバに乗って何日かの旅を続け、ヨッパという港町についた。ちょうどタルシュシュに向う船が港を出ようとしているところだった。ヨナは市場でロバを売って船賃を作り、主から逃れるために水夫たちと一緒に船に乗り込んだ。

船は帆をあげて海を進んだ。空は晴れていた。水夫たちは楽しげだった。

しかし船が港から遠ざかると、次第に大空は暗くなって行き、嵐の風が海をなぎ払うように吹き付けた。水夫たちは船を軽くするために積荷を海に投げ込んだ。それからそれぞれの自分の神に救いを求めて、祈った。

「お前も自分の神に祈れ。もしかしたら、その神がわれわれを思いやり、われわれは助かるかもしれない」と、船長がヨナに言った。

すると一人の水夫が、ヨナに近づいて言った。

「この船にのっている誰かが、嵐を呼びよせたんだ」

「くじできめようじゃないか。そうすれば、この嵐が誰のせいかわかるだろう」

そこで、水夫たちは順番にくじをひいた。最後にヨナがくじをひいた。ヨナの引いたクジが一番小さい数だった。

「さあ言ってくれ。この嵐が起こったのはどうしてなのか。お前は誰でどの国の民なのか」と、船長がヨナに言った。

「私はヘブライ人で、イスラエルの国から来たのです」

それから、ヨナは主の言葉に叛いて、主の前から逃げてきたことを語った。

「私を抱えて海に投げ込みなさい。そうすれば海は穏やかになるでしょう」

水夫たちは、ヨナの話聞いて主に祈った。

「ああ、主よ、一人の男のために私たちを滅ぼさないで下さい」

しかし、水夫たちの願いを主は聞き入れず、嵐はますます激しくなった。水夫たちはヨナを抱えあげると、海に投げ込んだ。すると突然空は明るくなり、風は収まり、船は穏やかな海の上を進んでいた。

水夫たちは主の力を恐れた。そして「あいつは死んだ」と言い合ったがヨナは死んではいなかった。ヨナが海に沈んだ時、大きな魚がヨナを飲み込んだのである。そこは恐ろしい暗闇だった。ヨナは魚の腹の中から主に呼びかけた。

「主よ、貴方は海の真ん中の深みへと私を投げ込まれた。あなたの全ての波、また波が私の上を越えて行った。私はあなたの前から追い払われた。海水が私を取り囲んでのどまで達し、淵が私を包み込んだ。それでも私は生きている。主よ、私は感謝の心を持って生贄を捧げよう。私が誓った誓いを私は果たそう」

ヨナは三日三晩、魚の腹の中で祈り続けた。4日目の朝魚は乾いた陸地にヨナを吐き出した。ヨナは大空を仰ぎ、太陽を仰いで主に感謝を捧げた。

再び主がヨナに語りかけた。「立ってニネベに行け！　そして大いなる町ニネベに向かい、私があなたに語る言葉を告げよ」

ヨナは今度は主の言葉に従い、ニネベに行った。ニネベは神々に捧げられた大いなる町で、行き巡るのに三日を要した。ヨナがニネベの町の門にやってくると、番人も兵士も道を開けた。ヨナは町の真ん中で主の言葉を告げた。

「あと四十日すると、ニネベは滅びるだろう」

すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけて誰もが粗布を身に纏った。

ニネベの王の耳にもヨナの声は届き、王は王座を下りて王衣を脱ぎ、粗布を身に纏って灰の上に座った。そして王はニネベに布告を出して、言った。

「人も家畜も粗布を纏い、力の限り神に叫び求めよ。おのおのは悪の道から立ち帰れ。あるいは神が思い直し、その燃えるような怒りを解いて我々は滅びずにすむかもしれない」

主は彼らの祈りを聞き入れた。ニネベは救われた。

しかし、ヨナはニネベが救われるのを望んではいなかった。

ヨナは町を出て、町の東の荒野に仮小屋を建てて、そこで町に何が起こるのを見ようとした。こうなってもまだヨナは、主の手によってニネベが滅びるのを、望んでいたのである。

主は、ヨナを見守っていた。そしてヨナの小屋のそばに、一本の唐ごまの木を置いた。木はヨナの頭の上に木陰を作り、ヨナはその唐ごまの木を喜んだ。

次の日の朝、ヨナが小屋から起き出してみると、その木の葉は茶色に変わっており、木は枯れかけていた。ヨナは夜の間に1匹の悪い虫が木を枯らしたのを知って悲しんだ。主がその木を枯らしてしまったのを知った。昼になると容赦ない日差しをヨナの頭を打ち、燃えるような風が吹き始めた。ヨナは主に告げた。

「私は貴方が分からない。どうして私の大切な木を枯らしてしまわれたのか」

すると、ヨナの耳に主の声が聞こえた。

「お前は自分で育てのではないのに、わずか一日で大きくなりわずか一日で枯れてしまったその唐ゴマの木を惜んでいる。ましてや私が大いなる町、ニネベを惜しまないことがあるのか。12万という大勢の人がおり、数え切れないほど沢山の家畜が居る、あの町を惜しまないことがあるのか」

この旧約聖書の話は、有名なソロモン王が現れ、古代イスラエルの最盛期を築いた時代から少し後のことで、紀元前800年頃といわれる。

一方、アッシリアは古代メソポタミアに君臨した大帝国で、その首都のニネベは、クユンジクの丘に建設された壮麗な壁画の王宮を中心に、町の周囲には12kmの城壁が巡らされていた。有名なアッシリアの粘土板文書の図書館もこのクユンジクの丘に建設され、旧約聖書の神話に影響を与えたといわれる「ギルガメシュ叙事詩」の粘土板文書は、この図書館の遺跡から発掘されたのである。

古代のイスラエル王国とアッシリアの接触は、イスラエルにとっては王国の歴史のほとんど全てがそれにかかっていたといえるが、アッシリアにとっては、周辺諸部族の一つにすぎなかった。

事実、旧約聖書にはアッシリアが凶暴で残虐な帝国として登場し、このヨナの話から後の紀元前722年、イスラエル王国はアッシリアに滅ぼされてしまう。

『アッシリアは町を包囲し、巨大な兵器を作って城門に転がしてゆき、また城壁を脆くするために下にトンネルを掘った。そしてある夏の日にはサマリアになだれ込み、最後の王を殺して、イスラエルの王は完全に失われた。』

二万七千二百九十人がサマリアから連れ去られ、最後の賢者である長たちはアッシリアに連れていかれ、ヘラからゴザン川のハボルまでの地域へ散っていった。メディアの町へ行ったものもいた。そして誰の消息も分からなくなった』

旧約聖書のこの記述は実際に起こったことであろう。神はアッシリアを滅ぼさなかったのである。歴史上の事実はヨナの説話とは逆で、イスラエルがアッシリアに滅ぼされたのである。ところがこの時から2代後の王の時、アッシリアはメディア、バビロン、スキティア人の連合軍に攻められ、ニネベは陥落してしまう。それは紀元前612年のことで、最後の王はクユンジクの丘に築かれた大図書館もろとも焼身自殺したといわれる。

この「ヨナの物語」は、古代のイスラエル人の選民思想が反映した寓話といわれるが、彼らはニネベの滅亡をどのような思いで見っていたのであろうか。（了）